

【シンポジウム・提言】

スポーツ仲裁・調停に
なじむ紛争なじまない紛争辻 口 信 良
(弁護士)

はじめに

このテーマでの発表を与えられたとき、まず、理論的にこのことを究明するのは、到底筆者の任ではないと自覚し、お断りしようと考えた。ただ、幸い筆者は、スポーツ法に関係する多くの学者・実務家の中でも、スポーツを巡る紛争や事件・相談に最も多く関わってきた内の一人だと思ったので、これまで筆者が関与してきた紛争等を列挙することはできると思った。そして、これらがどのような結果に終わったのか、その事実を知ってもらう中で、実際どれが「仲裁」や「調停」になじむのか、なじまないのか、特に今後携わると思われる若い諸君の考える題材にして貰えば、辛うじて筆者の当面の責任は果たせるのではと考え、発表させて頂くことにしたのである。

今回、改めて、これまで携わった紛争や事件・相談を並べて見て、これらの相談に来られ、又、受任に至った経緯なども含め考えてみた。その結果、日本人は揉め事や悩みがあっても、できるだけそれを回避する傾向にあり、法的に争うことが嫌い若しくは苦手な国民だ改めて思った。

筆者の理解では、スポーツに限らず、紛争・トラブルに巻き込まれたとき、人々の対応としては、

- ①泣き寝入り
- ②実力による抵抗
- ③私的な話し合い

④調停

⑤仲裁

⑥訴訟

の対応が考えられるが、筆者の体験例からも、日本社会では概ね①②③で処理され、法的な処理である④⑤⑥は、殆んど利用されていないのが実情だと思われる。

1. 筆者が担当した紛争・事件・相談

以下、この20年位の中で、筆者が、同僚と実際に携わってきた紛争等を列挙する。

(1) 契約更改を巡るもの

①プロ野球

これには、1992年の日本で初のスポーツ代理人とされたF選手の件、95年に投手としてメジャーへ移籍し新しい地平を切り開いたN選手の件、機構側が事実上代理人を容認しない時期に、水面下で球団と交渉した件、2000年に機構側が代理人制度をしつこく容認した以降の代理人として交渉した件などがある。この契約更改については、代理人の存在さえ事実上否定する、とても先進資本主義国の契約社会と思えない日本社会の実情を知る必要がある。典型例が渡邊恒雄氏の「巨人にはくだらん代理人を連れてくるやつはいないだろう、いたらそれだけで減俸だ」と言った暴言である。もっとも、当然のことであるが、機構側も球団側も、公式には一度も代理人が禁止されているとは言っていない(筆者 日弁連「自由と正義」1994年11月号29p)。

②サッカー

国際組織であるFIFAの一元的管轄下では、選手が代理人を付けることに、球団が法律上はもとより事実上も拒否するなど言うことはあり得ない。勿論、代理人としての実質的な資格問題はあるが、筆者は、2002

年ワールドカップ日韓大会でのキャプテンM選手など、複数の選手の代理人を努めたが、代理人になること自体でいやな思いをしたことは全くなかった。むしろ、M選手の件では、彼がプレミアリーグへの移籍を希望し、日英双方のチーム間では実質的に話がまとまったのに、英国の閉鎖的入国管理制度の下で、彼の移籍を果たせなかった、そのことが心残りであった。

③ラグビー

日本代表のM選手が、2002年、契約更改を巡りトラブルになり、移籍に関する代理行為を受任したことがある。ラグビーでは現在でもそうだが、野球やサッカーのようにプロ契約が一般的ではなく、競技に専念しようとする少数の選手が、個人的にプロ化を宣言し、契約や契約更改等を行っている。M選手以外にも、関西の当時Aリーグ(現在はトップリーグ)の複数の選手が、企業の従業員を辞し、プロ化を宣言して交渉を始めようとしたことがあった。ラグビーの場合、プロと言っても年俸は、プロ野球選手は勿論、サッカー選手とも大きな隔たりがある現状で、筆者は大企業での雇用契約上の地位を捨ててのプロ化のリスク(選手生命期間・生涯賃金の問題)等を説明した。いずれにしても、その話し合いの中で、企業側が準備したプロ選手契約書が、ほぼ当該企業でのパート職員が締結する契約書のままだったのに驚いたことがある。そして、プロスポーツ選手の契約主体としての地位が、まだまだ確立されていないと確認させられたのであった。

④バレーボール

日本リーグで活躍した女子選手であるが、膝の故障等があり現役続行が困難になった。その際、その関連会社のスーパーのレジ係に配属されそうになり、大きくて目立ちすぎると本人がいやがり、他の部所での仕事を希望したがかなえられないとのことでの相談だった。それはほとんど、いじめ・いやがらせの状態で、弁護士としては労働法上の問題としての法的措置も考えたが、彼女の父が事業をしており、父の会社の事務の仕事をすることになり退職した。嫁入り前なので余り騒がれたくないと言っておられた父の言葉が印象に残っている。

